

開設からのあゆみ

われわれが生きる現代は、拠るべき先例のない時代である。あらゆる組織はそれぞれの使命をつねに自問自答しつつ歩むことが求められる。わが国 5 番目の国立高度専門医療センター（ナショナルセンター）として開設された国立成育医療センターも例外でない。開設直後から、組織の絶えざる自己点検が必要とされる点で極めてユニークな組織といえる。

あらゆる組織は特定の目的を持つ。それぞれの高度専門医療センターに固有の使命は、従来自明とされてきたが、現在必ずしもそのようには認識されてない。成育医療センターの使命は何か。その名称が象徴するように、組織が作られた目的は、設立時の国立がんセンターのように単純、明快でない。当面、説明性の高い組織を作ることがわれわれに課せられた重要な責務である。成育医療センターが組織を挙げて挑戦すべき対象（target）は、がんや心臓病などの個々の疾患（biological morbidity）ではなく、全ての子どもと家族に共通する、新しい社会心理・環境問題である。この社会心理・環境問題は其の全貌を捕捉し、定義することすら困難であり、研究、診療、教育対象として全く未知の分野である。われわれは、この困難な問題に戦略的に挑戦しなければならない。

この使命を達成するためには、新しい発想、手法に基づく独創的な研究を推進する必要がある。その核心的テーマは 21 世紀の子ども、家庭、社会であり、“ヒトにとってこころの安定は肉体の健康に優るか”を問う必要がある。また、出生児の大規模コホルト・スタディなど、基盤整備を進め、小児科学、脳科学、社会心理学を包括する新しい研究領域を切り開く必要がある。このため、国の内外の研究機関との共同研究を逐次進めたい。

21 世紀初頭において、医学、医療、教育は優れて国際問題である。成育医療センターの全ての活動を国際的視野、水準から評価する仕組みを導入することは、組織のアイデンティティーを確立するための必要条件である。国際的評価に耐えうる、教育カリキュラム、教材整備、指導者養成、特に英語プログラムの導入を着実に進めることは、成育医療センターに強く求められている課題である。急速に国際化するアジア・オセアニア地域において、わが国が孤立し、普遍性を喪失することがないように、将来それぞれの国においてリーダーとなるべき有為の外国人材の受け入れ体制を計画的に整備する必要がある。

日本北米交換プログラムにより、平成 14 年 10 月、招聘教授として来日した、トロント小児病院、Cox 教授は、成育医療センターの現状を“hardware without software”と総括し、さまざまな斬新な助言を残して帰国した。また、ボストン小児病院からカリキュラムアドバイザーとして着任した Dr. Noble はわが国卒業後教育における評価システムの欠如を指摘し、そのモデルプラン作成に精力的に取り組んでいる。日本北米交換プログラムは成育医療センターの固有の使命を明晰にし、組織のアイデンティティーを確立する上でも今後一層重要となると期待される。

成育医療センター開設以来、1 年余が経過した。様々な困難な条件の下で、研究、教育、診療活動に精進された各位に深く感謝したい。

国立成育医療センター総長

松 尾 宣 武